

喫茶「なみのね」相談室

ハヤトは台風が近づいているその日の午後、思い出したように降る雨の中を少し濡れながらやってきた。

「一カ月たったけど、どう?」

小さな氷と一緒にアイスコーヒーを一口含みながら私は尋ねる。ハヤトは切れ長の細い目の奥にある黒目の部分を右に左に動かす。

「勉強を教えてもらえるのがいいです」

そういえば、勉強が嫌いというわけじゃなかった。むしろ、勉強して大学に行きたいから、今の道を選んだんだ。

「友達はできた?」

「そういう環境じゃないです。みんな、バラバラで、自分のことをしています」

「寂しくない?」

「別に」

強くなった。一カ月前までは、新しい環境に飛び込んでいくことに対して不安で一杯だったハヤトが、普通の高校生の子の男の子になっている。

「先週の土曜日に見学に行った子がいてね、良かったら君のことを教えてあげてもいいかなと思ったんだけど」

ハヤトは少し沈黙したあと、きっぱりと言った。

「関係ねえ」

私はこみあげて来る笑いを押さえることができなかった。

「たしかに。関係ないよね。君は勉強するために転学したんだから」

ハヤトも笑った。細い目を、いつそう細くして笑うハヤトの笑顔が好きだ。この笑顔が見えると安心する。右に左に行きかう黒目が落ち着く瞬間だ。

この喫茶店の一角でカウンセリングルームを設けてから、幾人もの高校生に出会った。ハヤトもその一人だった。憧れの高校に入った喜びもつかの間。原因不明で朝起きることができなくなって、そのまま一日中寝たきりの日が続いた。なぜとは聞かない。原因なんて、あつてないようなものだから。そのかわり、見た夢の話や聞いたり、二人で架空の話を作ったり。姿勢が悪いからと背中をまっすぐにしたり、しっかり立つ練習や歩く練習をした。

最初は泣いてばかりいた美奈子も、だんだん元気を取り戻した。

「あなたが泣いててどうするの?一番しんどいのはハヤトだよ」

美奈子は泣きながら笑った。ハヤトと同じ黒目が踊る。

「そうですね。私がすっかりしなきゃ。」

美奈子は私の妹のようなもの。この部屋を訪ねるお母さんたちは皆疲れ切っている。流れ流れて、どうしようもなくなった最後の砦がこの部屋。お母さんたちの涙の訴えを聞いていると、いつの間にか年の離れた姉妹のように思えてくる。

「ずっと寝てるんです」

最初の電話でも泣いていた。

「今日は、一緒に散歩できました」

「もう、学校をやめた方がいいかと思って」

美奈子の方が泣いたり焦ったりする日々だった。

数回の電話の後、初めて美奈子が連れてきたハヤトは、うつむき加減で黙りこくって、私からの質問には美奈子がすべて代わりに答えていた。右肩が極端に下がって、いびつな姿勢のまま黒目だけを左右にせわしく動かした。

「ためにしに四回だけ来てみようか」

私はそう提案した。期限を切る方が気楽に来られるようだから、皆にそう言うようにしているし、実際、だから来られても仕方がない。

四回目が終わったときに、ハヤトは自分で転学先の高校

を見学に行くまでになった。でも、まだ終わりを告げるには早い気がして、あと四回、来ることを提案した。その四回目が今日だった。

ハヤトは今日で終結することがわかっていたようだった。

「お世話になりました」

ハンカチをプレゼントしてくれた。ハリネズミたちが並んでいるハンカチだった。互いに温め合おうとして近づくと互いの針で相手を指してしまいう現象を「ハリネズミ症候群」というのを知ってか知らずか。君はやがて、こころのハリを収めて、ほんとに温め合える人を見つけられるだろう。

その夜、美奈子に電話した。

「ハヤトはもう大丈夫。今日で終結にした。もう一人でやってける。来なくていいよ」

美奈子もそれを予期していた。

「頑張らせすぎないようにね。ハヤトは繊細だから。いつも周囲に気を配ってる」

「はい、私がプレッシャーをかけたらダメということですよね」
「そういうこと」

美奈子は明るく笑った。外からは静かな波の音が聞こえてきた。